



子供讚歌 (九)

倉橋惣三

八 當時の『新保育』

1 お茶の水幼稚園の新主事

若い彼は當時の保育界の現状にあきたらなかつた。それは彼の研究の結果か、若さの勢か分らないが、兎に角、不滿の點が理論にも實際にも多かつた。但し彼自身の考え方として、教育に新がえられない譯ではない。千古永劫の眞こそ貴いのであるということを知つていた。それで、世間の新しがり屋のように、何も事々しく新保育の名で高慢な顔をしようなど、は思いもしなかつた。たゞ一途に眞保育を求めたのであつた。彼がフレイベリヤン・オルソドツクス派にたてつたのも、論理主義と傳統主義とに眞が覆われるのを怖れたからに他ならなかつた。

そういう心持のなかで、彼は東京女高師附屬幼稚園の主事に任ぜられた。(大正六年)。前主事安井哲子氏が、新設の東京女子大に轉ぜられた後任として、彼は講師から教授になり、兼ねて主事を命ぜられたのである。時の學校長は湯原元一氏であつた。識見の高く廣い人であつたが、幼稚園のことは一切を彼に任せて思ひのまゝにさせた。それだけに彼も亦、お茶の水幼稚園の園丁になりきつた。

新まいの園丁に大した花壇の設計なんか出來ようもないが、一應氣をかえるためにしたことは、創園以來の古いフレベル二十恩物箱を柵から取り降して、第一、第二その他系列をまぜこぜにして竹籠の中へ入れたことであつた。すなわち、恩物を積木玩具としたのである。これは、特別の意義をもつものとして取扱われた恩物の格下げか、一般

玩具としての横すべりか、見ようによつては論義のありそうなことだが、彼はたゞ幼児の積木遊びを、幼児の積木遊びとして幼児達にさせたかつただけのことである。勿論、フレーベル原理の研究用としては、正統な恩物の幾組かを残しておいたが、その他は積木の籠として各保育室にわかち備えられたのである。こういうと如何にも破壊的革命でもしたように聞えるかも知れないが、その實は、以前から恩物が恩物として用いられてはいなかつたのであり、棚上げされていた譯合なのだから、實際には大した變り方ではなかつたのである。彼は後にカイルハウやプランケンブルヒにフレーベル幼稚園の舊跡を訪ねた時、そこにある謂わばフレーベル手澤の恩物といつていゝものを、古寶に接する敬意をもつて見たのであるが、また、フレーベル舊跡のところへで恩物三體の模型や圖表を、恰かもフレーベルの象徴として尊敬を以て見たのであるが、お茶の水の幼児達に、恩物を竹籠にあげて入れて遊ばせたことを悔いもせず、フレーベルに對して必ずしも濟まなかつたとも思わなかつた。

新園丁が同時にしたことは、從來遊嬉室の正面に掛けてあつたフレーベルの肖像畫をとつて、職員室の壁面に移したことだ。これは、箱の中の恩物よりは人の目につき易い廣間の正面のことだから、思い切つた模様があつたかも知れない。殊に四月二十一日のフレーベル誕生日などには、この額の前で祝いが行われたりしたのだから、外來の參觀者にも不思議に思われなくてもなかつたらう。彼は勿論フレーベルを尊敬して日々にその肖像を仰ぐ心において人後に落ちない。だから職員室に掲げたし、後プランケンブルヒに行つた時は、その原版を買つて、わざ／＼持ち歸つて、その後ずつと長く主事室に掲げた。しかし、それを遊戯室に掲げるのは誰れのためか。子ども達をしてフレーベルを仰がせるのは必要もないことである。幼稚園はお宮ではない。お宮としても、その本尊は幼児である。その本尊を私達の前に、如何にもこゝの本尊さまのようにうやうやと飾るのは可笑しい。殊にフレーベルの決して喜ばないことであるに相違ない。フレーベルの幼稚園ではなくて幼児の幼稚園であることに、理屈も心もちも合はぬといふものでなからうか。そう考えて額をおろした園丁は不遜でも無禮でもなかつた筈である。従つて何んの神罰もあたらなかつた。もう一つの理由として、園丁は幼稚園の各室や廊下を、名畫や彫刻で藝術の世界にしたいと思つていた。充分の資料が得られないので、その幼稚園美化の夢は實現しなかつたが、その企畫と、あのしかめつらのフレーベルの肖像とは調和がとれないのである。

こうしたことは、別段大きな問題でもなし、改新とか革新とかいうようなことでもない。たゞ、幼稚園は純一に端

的に簡明に、幼児の幼稚園でなければならぬという、又、必ずそうしたいという、彼の豫ての考えの小さなあらわれに他ならない。そして、そういう考えを固く彼に抱かせ、その完全な實現の喜びを、この幼稚園を預る楽しみとさせたのは、いうまでもなく、子どもが與えてくれた至上の命令であつた。彼は幼稚園を子ども以外の誰れのものともしたくない。

2 アメリカの新幼稚園を見る

彼が新主事として何彼と考案しているうちに、文部省から教育學の在外研究員として歐米へ派遣されることになつた。彼がこの機會を利用して、新保育の活きた現況を視ることを怠らなかつたのは勿論である。殊にアメリカではデュエー流の新幼稚園が新興していた時だつたし、イギリスでは教育の新政策と共に保育學校が新興していた時だつたから、此の二つは彼の新保育の調査の主な目標として心がまえされた。ドイツのペスタロツナ・フレーベルハウス、スイスのデエネヴァの幼稚園、フランスやベルギーの宗教幼稚園、殊にイタリーのモンテッソリーの『子供の家』など世界の有名な保育機關を見落してはならぬと豫定していたが、特にねらいを向けた興味を中心は、米英のそれら『新保育』であつた。

今ではカリフォルニヤが新しく活潑であるらしいが、當時の『新保育』の本山は、何んといつてもコロンビア大學にあつた。デュエー教授の本據として新教育全般の大殿堂であつたが、保育としても、『フレイベル』批判の著者であるキルパトリックが大學で教育哲學を講じて居り、あの有名なミス・ヒルが大學幼稚園を主管して居り、『新保育』のために氣焔をあげていた。キルパトリックは米人としては小柄な人で、長い髪を無ぞうさにかきあげて、いつも低聲で物靜かに語る哲學者らしい人である。彼はその講義に參していたが、講義後よく大學に近いハドソン河沿いの散歩路を二人で歩きながら、いろ／＼と話して呉れた。ミス・ヒルは、長身肥大堂々たる風采の社交的人で、丁度夏の間だつたので、いつも大きな白い羽根團扇をゆつたりと動かしながら話した。初対面の日、彼が東京で試みている『新保育』の自己紹介をしたら、そうかといつてすぐ握手をしてくれ、彼が暇乞いに行つた時、その場で英國のマクミラン女史始め、歐州各地の知名な保育者に宛てた十餘通の紹介狀をタイプさせて、その場でサインして呉れるといつた、潑刺としたエナージエチック・レディである。

但し彼の視察の眼目は、これらの人の意見を聴くというよりは、その幼稚園が實際に如何に運営されて居るか、殊にその幼児達が、實際に、如何に活動しているかを、仔細に検討するにあつた。彼はミス・ヒルに教えられて、アメリカ各地の所謂『新保育』幼稚園をも多く訪ねたが、どこでも彼の目のつけどころは幼児生活の實際にあつた。『新保育』の新か、舊を破るだけの新型になり易いことを彼は知つていたからである。そして、彼は卒直に言えば、どこどこでも感服したとはいへない。主義は『新保育』でも、幼児の生活は別に變りない點も残つていた。時としては、『新保育』の型の中へ幼児がはめこまれていない田舎の幼稚園などに多かつた。そして、ここでは、先生よりも幼児の方が主になつて生活させられているのが通有の特色であつた。子どもが眞に自ら活きる力と道とをもつてゐることは、アメリカでも日本でも變りはないと思つた。著名な學者や教育者は、それ／＼の角度から、子どもを觀る觀方を教えてくれるが、實體を教えてくれるものは子どもそのものである。それにしてもコロンビア大學幼稚園の子らが（その中に日本の子が一人居た）活き／＼してゐた姿は今も目に残る。彼は先生のプロジェクトよりも自分達のプロジェクトで遊んでいる風であつた。

3 アメリカの兒童遊園と兒童圖書館における幼兒

彼は幼稚園とか、保育所ばかりでなく、子どもの集るところを、どこまでも見てまわつたのであるが、その中で最もよく視たのは兒童遊園と兒童圖書館とであつた。その頃まだ新しかつた少年審判所もその一つであつたが、幼兒には關係がない。兒童遊園も兒童圖書館も、少年青年に對して大きな活動がされてゐるものであるが、ここでは屢々幼兒を見たりし、こういうところにこそ、新保育の一つの形が見られると思つたりした。

兒童遊園では、シカゴが一番盛であつたが、そのどれにも、幼兒の場といつたものがあつた。ネットを高く張つた青少年の場と少し離れて、芝生と砂場と浅いプールと、日よけの下の低いベンチとからなる、可愛らしい一劃で、多くはきれいな花壇が近くにある。ここでは幼児達が軽い服と帽子とで、自由に、全く自由に遊んでゐる。母親が附添つて來ていて、ベンチに腰をおろして編みものなどをしてゐる。兒童遊園にはプレーグランド・ディレクターという人が必ずいて、遊戯指導をしているのだが、幼兒の場では、母親が代る代るその役をしてゐる。役といつて、危険とい

うものは少しもないように施設されているから何もしないのが役目といった風である。

幼児たちはいろ／＼の年齢があるが、極く幼いのは別として互に、いつしよに遊ぶというのでもなく共に遊んでいる。アメリカの児童遊園は社會性の陶冶ということが、大切な主旨とされているのであるが、幼児の場でも、幼児の社會性らしい淡さと、しかしそのよるこびが充分味わづれている。

格別、手をとつて遊戯をさせるでもなく、揃つて歌をうたわせるでもなく、坐らせてお話を聽かせるでもなく、それこそ完全な自由生活である。自由生活を新保育の基礎原理とすれば、このまゝで立派な幼稚園である。たゞ幼稚園と違ふところは、こまかい材料による製作遊びがなく外遊び一本の點であるが、そのために製作稽古を課せられることが少しもないのは、いよ／＼新保育かも知れない。大きなまりとか、力のいる曳きおもちゃのたぐいが、幼児らの樂しむに任せてあるが、それが無くても面白いのであるから、とりあいは行われぬ。近所の母親達はおひるまゑとか、午後とかに、乳母車に乗せて来る。シカゴのような大都市生活では、日に一度は必ず戸外で日光に浴させるのが常識と習慣になつていて、その意味では、こゝは戸外幼稚園であり、ひなた幼稚園である。保育學說のむつかしい理屈のないのが、幼児らののび／＼している根本かしらとも思われたし、母といつしよなのが、幼児の生活から方法教育が分離しない所以なのかも知えさせられたりした。『先生』が居ないのである。

児童圖書館も、アメリカで誠によく發達している社會教育施設である。圖書館である以上、本を讀むところとして、少年以上のものであり、彼はよくそこへ出かけていつて、行届いたライブラリアンによつて行われている讀書指導の狀況を見、彼の宿の近くの或る小圖書館では、偶々その書棚にあつた、日本童話の英譯について、屢々話をさせられたりした。

ところで、彼の心を最も引いたのはニユー・ヨークの中央圖書館の児童館にあつた幼児の室である。そこには幼児向きの繪本が澤山備えてある。そうして、その室の主任は若い美しいストーリー・テラーで、いつもは幼児と共に繪本を見るが、時々幼児らの小群の（大人數ではない）ために、お話を聽かせる。彼は、その機會をのがさないようにしては、自ら可愛らしい幼児になつた。アメリカのストーリー・テラーは、極めて無技巧に話す風があるが、幼児のための場合それが殊になだらかである。その美しい人は無雜作に椅子に身を寄せて、靜かな聲でこゝ／＼と話をする。幼児たちは椅子にかけないで、小さな圓座風の敷物にあぐらをかいて、話手の前に輪をつくつてゐるが、時々一人二

人立つて、窓の方などへいくものがあつても、そのまゝに任せてある。或る時その人に、子ども達はよく聴いていますねといつたら、後ろの大きなマントルピースを指して、冬の日、こゝにあか／＼と火が燃えていると尙いゝのですかねと、きれいな齒を見せて笑つた。きれいな齒といえ、その人が子どもに話すとき、唇の動かし方の一々正確なものには感心した。

圖書館でのことだから、必ずしも定日定時間というのではない。幼稚園に來ているから、何曜日何時から、カリキュラムに従つて必ず行われるというのではない。集つている幼児らの様子を見て話が初められるのである。時には子どもの方から、せがまれることもあるようだが、話そのものというよりも、話手と聴手との間の親しみが主になつてゐる。彼はこゝでも、新保育の一部を見たような氣がした。幼児らは全く自由な氣分である。話す人も全く自由な氣分である。自由とは、形よりも氣分の自由が中心になつてゐる生活である。

児童遊園でも、児童圖書館でも、社會教育である。社會教育こそ、自由生活の中での教育である。幼稚園も保育所も社會教育ではないが、自由生活の中での教育という點では、こういう光景から教えられる點が多かつた。幼児らに教育されている氣分がないのは素より、おとなの方にも、教育をしていないのではないが、教育をしてゐることを意識してゐないのである。母親たちは、隣の室で、邪魔をしないように本を讀んでいた。

4 イギリスの新しい「保育學校」を見る

ロンピヤの教育大學では、大學の講義のあいまゝに幼稚園を見にいりびたることが出來た。イギリスでは、そういう都合のいゝ譯にはいかない。そこで、彼は大學のほかに、ロンドンの社會事業學校に出席して、児童保護の各方面と併せて保育事業について調べることにした。更に、社會的兒童問題の方面で、彼が最有益な指導を謝さなければならぬのは、ラツセルセーデ・フワウンデーションであつた。その圖書館の如き、我國にも是非ほしいものと思つた。

さて、新保育として、彼の是非見たかつたのは、マクミラン保育學校である。彼はミス・ヒルの紹介狀を以てマクミラン女史を訪ね、幾度となくその實際を見せて貰つた。場所はロンドンも場末と思われぬ。世界に名高いグリニツチ天文臺の後方（市の中央から行つて）に當つていたと記憶する。保育學校は美しい前庭をもつ瀟灑な平屋建てで、

幾つかの幼児室の他に完備した調理室があり、流石に舊い普通の託児所とはちがつたところがある。イギリスの託児所はどこまでも乳児本位で、乳児保育の設備が整い、保母さんも白衣の乳児省護婦が専ら育児に當つてゐるのであるが、保育學校には乳児と幼児が居り、育児と共に教育的空氣が濃い。

一體保育學校はマクミラン女史らの特志社會施設としては前からあつたが、一九一八年の教育制度の改革の時に學齡前の教育機關として公認せられたのである。舊式の幼児學校に對するいろ／＼の教育的批難や、舊い幼児保育所に對する教育的批評に基き、社會的幼児教育の新しい形式として主として社會黨の教育政策から主張されたものである。マクミラン女史も同黨の著名な闘士である。その風格にも、幼児らに接する時の柔和な溫容の一面に、全英國の『働く母』の子らの心身を護ろうとする確固たる意氣が溢れてゐた。彼が保育學校と幼稚園との別について問うたの對して、差別なんかは考えない。われらはたゞ社會の必要に對して働くといつた意味の言葉を以て答へられた。施設の理論からではなく、どこまでも社會の必要に應じて適切に施設せられるというイギリス特有の現實觀が、こゝにも徹底してゐるのが感ぜられた。保育學校は後アメリカに渡つて種々の進展が行われたが、彼が見た創始當時のイギリスの保育學校は、社會の必要のあるところに應じてつくられてゐるといふハッキリした趣があつた。彼はマクミラン女史の著書を読みながら、女史の説明をきながら、この保育學校の見學に教日を用いたのであるが、今もまだ存してゐるのならば、あのロバート・オーエンのニューラルクの保育施設を見に行かすには居ないだろうと自ら思つて見える。イギリス人は觀念に構わない國民である。當時モンテツソリーの自由論がイギリスにも取りはやされ、(彼もロンドン滯留中のモンテツソリー女史の講習を多くのイギリスの先生達と共に聞いた)保育學校でも、屢々その名が出たが、先生達は『自由』を以て『しつけ』には置きかえていないようだつた。マクミラン女史も、保育學校において、特にデシプリンが必要だということを屢々語つた。彼がオーエンの保育を思ひだしたのも、それが與つてゐた。保育學校は子どもをたゞ保護すればいゝ處ではなく、デシプリンの缺けざるを得ない家庭の子らに、しつかりデシプリンを興えるところだというのが、少くもマクミラン女史の強い意見として、彼をうなづかせた。

5 イタリヤのモンテツソリーの「子供の家」を見る

當時の幼児教育界の新しい話題は、なんといつてもモンテツソリー主義であつた。彼は或る新聞(萬朝報か)でそ

の短い紹介で初めてその主義を知つて、非常に新しい刺激を感じたのであつた。アメリカの教育雑誌で、その稍くわしいことを讀み、更に興味を感じさせられたのであつた。その著書（英譯）を急いで讀んだのは勿論であつたし、その抄録を『幼児の教育』に載せたりもした。しかし、その自由教育には、必ずしもそう深いものを感じなかつたし、その感覺教育論には、どことなき疑念をも感じていた。アメリカの博覽會にその教具の陳列のほかに、硝子張りの部屋の中で、モンテツソリー方法に訓練せられた幼児たちの實際作業が展覧されて評判だといふ記事を讀んで、彼一流の小さい反感のようなものを感じさせられた。しかし、新しいものは新しいものとして研究しなければならぬことは彼の研究心の命令するところであつた。

アメリカの幼稚園を見て廻つてゐる間、モンテツソリーはどこでも新しい名であつた。イギリスへ渡つてからも、その新しい名を多く耳にした。丁度その時女史がロンドンに來て講習會が開かれていたので、その講演を聞いたことは勿論であつた。インテレクチュアル・リーダーそのものといつた印象を快く受けたし、その講演もはき／＼していて明朗であつた。彼がイタリーへ行つた時その『子供の家』を訪ねたのは勿論である。ローマの場末といつた風のところにあつて、女史がそうした地區の幼児達に對してもつてゐる關心と教育とは直ぐ感じたが、所謂モンテツソリー法の實際を、その本家でゆつくりでみたいといふ彼の希望は充されなかつた。女史が外國への講演旅行中で留守であつた爲かも知れないが、國外における盛名の活潑さは、そこでは感じさせられなかつた。彼のイタリー旅行中の興味が宗教藝術の方に傾きまつていたのも、その理由だつたかも知れない。

そして、彼の初めからの一抹の不安は、その教育論が唱え出された舞臺としてのイタリーの社會と新教育の生れる母胎としてのアメリカやイギリスの社會との相違を見るに及んで、自ら説明せられるものを感じたのであつた。

『外國で見て來た新保育』が『彼が子供から學んだ新保育』と、如何に結びついたか、後の日の話である。但し、ここで『新保育』と言つてゐるのは、自他ともに三十年も古い昔のことである。